

「GIRI GIRI」

—2 稿—

2026/5/19
雨森 れに

〈人物表〉

今野 茉白 こんの ましろ

(16)

高1。剣道経験者の剣道部員

立石 彩華 たていし いろは

(17)

高2。剣道部員。全国大会優勝者

友人A

(16)

友人B

(16)

1. 高校・道場（夕）

一般的な剣道稽古場。壁には「礼・義・理・勇・誠」の五つの文字が掲げられている。
激しい竹刀の音。部活動中である。
今野茱白（16）と立石彩華（17）が打ち合う。
ふたりの隙間から「義」と「理」が覗く。
攻防の中で彩華の剣先が茱白の面金前を通過する。
審判をする顧問、一瞬反応。
茱白、視界が遮られたことで、顔を傾ける。
彩華、その瞬間に面を決める。

2. 高校・昇降口（夕）

靴箱には、まばらに靴が残っている。
トロフィーを飾る棚があり、剣道トロフィーのリポ
ンに『令和6年度個人戦優勝 立石彩華』とある。

3. 高校・廊下（夕）

昇降口近くの廊下。部活帰りの生徒がちらほら。
茱白、制服姿で友人数名と歩いている。

茱白 「どうやったら彩華先輩に勝てるかなあ」

友人A 「ええ。だってあれはさあ」

友人A、友人Bと目を合わせる。

友人B 「だよー」

友人A 「反則ギリギリ、じゃん？」

茱白、顔をしかめる。

茱白 「あれは流れじゃん。たまたま剣先が——」

友人B、話を遮って、

友人B 「昨日も一昨日も同じこと言ってるし。『たまたま』って」

友人A 「もう庇うのやめなよ」

友人B 「あれは狙ってるよ」

茱白 「毎回ギリギリ、なんて狙えないと思うけど」

友人AとB、足を止める。

茱白、ふたりと向き合う形で立ち止まる。

友人A 「茱白、気づいてるんでしょ？」

友人B 「アンタが我慢する意味ってなんかあるの？」

茉白、顔をそむける。

三人の近くにはトロフィーの棚。剣道トロフィーが夕陽に照らされ輝いている。

4. 公園・内(夜)

住宅街にある小さな公園。

彩華、よれたTシャツ姿で素振りをしている。

彩華 「299……300ッ」

彩華、竹刀を下ろす。

肩で息をしつつ、汗を拭く。

竹刀を構えなおす。

面・小手・胴をすべてガードする、三所隠し状態。即反則になるガードである。

5. 公園・外(夜)

公園の外側。住宅街の路地。

茉白、竹刀袋を背負っている。

公園に入ろうとし、彩華の存在に気づく。

彩華は竹刀を細かく動かしている。

茉白、眉をひそめる。

6. 公園・内(夜)

茉白 「先輩、お疲れ様です」

彩華、茉白に驚く。

彩華 「お疲れ様。家、この辺だっけ」

茉白 「はい。先輩も？」

彩華 「うん。今まで会ったことなかったよね。なんでだろ」

茉白 「いつもは家の庭でやってるんです。今日は気分転換でここに来ました」

彩華 「ふうん。私、時間ギリギリだからすぐ帰るけど……一緒に素振りする？」

茉白、ギリギリという言葉に表情が強張る。

彩華 「あ、自分のペースでやりたいよね。ごめん」

茱白 「あの、そうじゃなくて」

茱白、言いにくそうに、

茱白 「さっきの、なんの練習だったんですか」

次は彩華の顔が強張る。

茱白 「面・小手・胴を隠してました。三所隠しは即反則じゃないんですか」

彩華 「違うよ。中心を奪い合ったときのイメトレだよ」

茱白 「三所隠しを誤魔化すときにやる動きにしか見えなかったですよ」

彩華の汗が地面に落ちる。

彩華、茱白を睨んで、

彩華 「それ、先輩に言うこと？」

茱白 「わ、私はいつも正々堂々と戦ってますし」

彩華 「まるで私が正々堂々としていないみたいだね」

ふたりは見つめ合う。

彩華はよれよれのTシャツ姿。

茱白はスポーツブランドのジャージを着ている。

彩華、苦笑う。

茱白 「なんですか」

彩華 「なんでもないよ。ね、明日さ。朝練前に一戦しよ？」

茱白 「別いいですけど……」

茱白、少し悩んで、

茱白 「正々堂々でお願いします」

7. 高校・道場・外観（朝）

静かな朝の空。

道場の入り口が開かれており、二つの靴が並んでいる。

8. 高校・道場（朝）

茱白と彩華が向かい合っている。

竹刀と竹刀が当たる音。

押し合い。茱白のほうが力強い。

彩華、押し合いに負けそうになる。

茱白、離れる。
ふたりは間合いを取る。

彩華 「押し出さないんだね」

茱白 「力で押し出すのは反則ですよ」

彩華、カチンときたように間合いを詰める。

続いて竹刀と竹刀がかち合う。

彩華の打ち込みに耐える茱白。

茱白、もうだめかもしれないという表情。

彩華、にやりと笑う。

彩華 「戦う意思を見せないのも反則だよ！」

更に勢いを増す。

茱白、それを見越していたように竹刀を流す。

彩華の後ろに回る。

茱白、一閃。胴が決まる。

息も絶え絶えで、

茱白 「はじめて、勝ちました」

彩華、そのままの体勢で荒い息をしている。

茱白、竹刀を下ろす。

面金を外し、

茱白 「なんで、いつも反則ギリギリを狙うんですか。そんなこ

としないで」

と、悔しそうな表情。

彩華も面金を外す。

彩華 「何が何でも勝ちたい。それじゃだめなの？」

彩華、その場に座る。

彩華 「うちの家、お金、余裕なくてさ。せめて、負けないのが

恩返しみたいな」

茱白、想定外の言葉に動揺を隠せない。

茱白 「おうちの人にそう言われてるんですか？ できなきや辞

めろとか……」

彩華、首を振る。

茱白、竹刀を握る手に力がこもる。

茱白 「それでセコいことやってたら、自分に負けてるじゃない

ですか！」

彩華、目を見開く。

茱白 「先輩はそんな勝ち方がしたいんですか？ こんなに実力があるのに、なんでちゃんと向き合えないんですか！」

茱白、肩で息をしている。

彩華、唇をかむ。

彩華 「アンタだって全国行きたいでしょ」

茱白 「先輩は私の憧れなんです。中学の全国大会で見かけた時から、ずっと。強くて、まっすぐで、かつこよくて、やさしくて……」

茱白、息が詰まり、天を仰ぐ。

大きく一呼吸。

彩華の前にしゃがむ。

茱白 「個人戦の次は団体戦で全国いきましようよ。私と一緒に行ってください。絶対負けないんで」

彩華、茱白の顔を見て、力が抜ける。

茱白の目を拭って、

彩華 「いいけど、どうする？ 正々堂々だけじゃ高校の全国は狙えないかもよ？」

茱白、顔を雑に拭い、立つ。

彩華 「負けたら、全部無駄になっちゃうよ」

茱白 「そんなことないです。そもそも、勝つので」

茱白、手を差し出す。

彩華、一瞬躊躇。すぐに力強く握り返す。

ふたりの顔には勝気な笑顔が浮かぶ。

友人AとB、入り口からこの様子を目撃。不思議そうな顔。

9. 高校・道場(夕)

夕方の部活動中。

茱白、竹刀を構える。

彩華、それを微調整してあげる。

10. 公園・内(夜)

茱白と彩華、素振りをする。

11. 道（朝）

ふたりの汗が光る。

試合のシミュレーションをスローで行う。

ふたりの笑顔。

色づいた木の葉がひらり。

彩華、制服で竹刀袋を持っている。

交差点で立ち止まる。

腕時計を見る。

茱白 「先輩！」

彩華、顔をあげる。

茱白、満面の笑みで近寄る。彩華と同じく制服に竹刀袋を持っている。

ふたりはゆっくりと歩き出す。

行く先には市民体育館がある。

12. 市民体育館・外観（朝）

「全国高等学校剣道選抜大会」の看板。

関係者で賑わっている。

茱白と彩華、他の部員と合流する。

13. 市民体育館・内（朝）

大会会場。大勢の観客と生徒たち。

茱白、満ち足りた表情。

彩華も同じ表情をしている。

ふたりは笑みを交わす。

小手をつけた拳が重なる。

14. 高校・昇降口（夕）

棚には新しい剣道トロフィー。

リボンには「令和7年度団体戦優勝」とある。

おわり